

靖国神社問題

社会情報学部

プリホードゥキナ・ダリア (ベラルーシ)

はじめに

第1章 靖国神社問題の宗教的な側面

第2章 靖国神社問題の歴史的な側面

第3章 日本人の世論

終わりに

参考文献

はじめに

戦後数十年を通して、靖国神社に対する宗教の問題は定期的に日本と近隣諸国で脚光を浴びていると見られている。それだけでなく、日本社会における意見の分極を引き起こし、近隣諸国、主に中国、韓国との外交紛争の原因になっている。特にこの問題の原動力になっているのは首相公式参拝（安倍首相 2013 年、小泉首相 2006 年）である。

この問題の根拠は宗教、歴史、イデオロギーと政治との関係という国内および外交政策であると考えられている。靖国神社問題を語る上でまず出てくる疑問は、なぜ靖国神社の問題が発生したかという点と、その解決策はあるかどうかという点である。

本稿ではまずはじめに問題の宗教的と歴史的な基本を分析し、次に日本人の世論を検討する。最後に問題点に答えてみたいと思う。

第1章 靖国神社問題の宗教的な側面

西洋の研究者は日本人のメンタリティーは、神道の中でも死者の魂すべてと特に、戦争で殺された死者の魂に関する考え方と関連していると主張している。神道 は日本のメンタリティーの主体だと言われている。重要なことは、大陸諸国の仏教の伝統と著しく異なっている。

そもそも神道とは、外来信仰である仏教に対して形成された概念であるが、もともとは日本民族固有の伝統的な宗教的实践と、それを支えている生活態度から発生し、祖先神・氏神・国祖神の崇拝を中心として形成され、大和朝廷によって国家的祭祀として制度化されたものである。その後、仏教や儒教の影響を受けながら、両部神道・伊勢神道・吉田神道・垂加神道・復古神道など多くの神道理論が生まれている。

同時に、日本人に「あなたの宗教は何ですか」と質問してみると、すぐには答えがかえってこない。そのために「日本人は無宗教だ」といわれるのだが、それは、日本ではあらゆる宗教が共存しているからだ。古代から現代につづいている日本の民族信仰である神道は、日本人にとって生活になじみあるものになったのではないだろうか (3)。

靖国神社問題に対する神道の様相は死者の魂すべてと戦争で殺されたの死者の魂に関する考え方だ。簡単に説明すると、神道においては、「人はみな神の子であり、神のはからいによって母の胎内に宿り、この世に生まれ、この世での役割を終えると神々の住まう世界へ帰り、子孫たちを見守る」ものと考えられる。よって、神葬祭は故人に家の守護神となっていたためだけの儀式である。また、神道において死とは穢れであるため、神の鎮まる聖域である神社で葬祭を行うことはほとんど無く、故人の自宅か、または別の斎場にて行う (4)。

仏教は、人間を、輪廻しつつ成仏をめざす修行の主体と考える。死んだ人間はすぐ別の生命に再生して、この世界をまた生きる。死者の世界も、靈魂も、存在しないと考える。すなわち仏教は、人間の死について、神道とまったく異なる考え方をもっている (2)。

しかし、仏教と神道の相互影響の歴史はさまざまな要素が渾然一体となり、神道につながった。

こうして日本人の平均的な死生観がかたちづくられ、今日に至っている。それは、人間は死ぬと、靈魂となり、しばらく周囲をさまよっている。そのあと、三途の川を渡って、あの世に行き、仏（ないしはカミ）となる。現世に執着や怨念が強い場合は、成仏できずに、幽霊となる。行ないのよくなかった者は、罰として地獄に墮ち、閻魔大王や鬼たちに苛められる。盆には死者たちが、家に戻ってくる。祖先は戒名をつけ仏壇の位牌に祀り、その前で線香をあげる (2)。

ここで、神道歴史上での重要なポイントに戻しましょう。

幕末から明治維新にかけて、日本人のカミに対する考え方を大きく変えたのは、平田篤胤の唱える平田神道である。

平田は、神道を研究して、つぎのように唱えた。人間は死ぬと、仏になるわけでも黄泉

に行くわけでもない。霊となる。とりわけ国事に殉じた人びとの霊は、穢れのない、英霊となつて、後続する世代の人びとを護っている。英霊とは「すぐれた霊」という意味である。個々人には霊があつて、死んだあとでも永遠にその個性を失わないという革新的な考え方は、平田が禁書だった漢訳聖書を密かに読んで、キリスト教から学んだともいわれる。

誰もが霊になるなら、日本人全員が檀家制度によって仏教と結びつけられ、仏式の葬儀を行なうとしても、それと無関係に神道式の慰霊の儀式を行なうことができるのである。戦死者を祀ることもできる。明治政府を樹立した官軍は、平田神道を採用し、戦死者の英霊を招魂して、儀式を行なった。1869年には東京の九段に招魂社が設けられた。そして後に陸海軍が所管する、明治維新の志士や戦没者など国事殉難者の英霊を祀る施設であり、それが靖国神社となるのである。国のために命を犠牲にした一般の人びとが、カミとなって祀られる神社である。

平田神道と靖国神社は、国家のために献身する近代的な国民を創出する効果があつた。そのためには、神道と仏教が分離する必要があつた。こうして幕末から維新にかけて起こつたのが、廃仏毀釈である。廃仏毀釈とは仏教を排除しようとする運動のことである。政府の指導で、神社と寺ははっきり分けられ、あいまいであることは許されなかつた。明治維新とともに、政府が主宰する国家神道が生まれた。文部省は、「神道は日本人の日常生活に溶け込んでいるから、宗教でない」という見解をとり、国家神道を日本人全員に強制したのである。

死んだ人間がカミになる、という考えから、新しい神社が明治以降にいくつもつくられた。明治天皇を祀る明治神宮。陸軍の乃木希典を祀る乃木神社。海軍の東郷平八郎を祀る東郷神社。各地の地元出身の戦没者を祀る護国神社。天皇の写真を「ご真影」として学校に配り、拝礼したり、皇居の方向に向かって遥拝したりするやり方も、創造された。天皇を「現人神」とする、皇民教育である。

第二次大戦が終了すると、占領軍の指令で、国家神道は禁止された。靖国神社は民間の宗教法人として存続した(2)。

第2章 靖国神社問題の歴史的な側面

靖国神社は、江戸時代の幕末、長州藩（山口県）で1863年に結成された奇兵隊士の霊を弔うために、高杉晋作（1839～1867年）が招魂社造営を發議したことに始まる。その後、68年の戊辰戦争後に、官軍将校の招魂祭を江戸城（現在の皇居）で行うとともに、京都東山（現京都市東山区）では官軍の戦死者を祀った。

これを機に、幕末、明治維新时期の戦没者を慰霊、顕彰する動きが全国的に活発になり、日本陸軍の創始者である大村益次郎（1824～1869年）が明治天皇に東京に招魂社を創建することを献策した。明治天皇は1869年、現在の東京・北九段に「東京招魂社」を創建し、戊辰戦争の戦没者3,588柱を合祀した。しかし、本殿が竣工したのは3年後だった。その後1879年に、軍直轄だった東京招魂社は、「靖国神社」に改名した。

最初から靖国神社は「鎮魂」を目的としていた。鎮魂とは人の魂を鎮めることである。だが、日清戦争、日露戦争、第1次世界大戦を経て「慰霊」から「顕彰」へと変化していった。特に、第2次世界大戦中、日本兵が戦友との別れの際に「靖国での再会」を誓ったことから、靖国神社は日本兵の「心のより所」となり、軍国主義化の中で第2次世界大戦の戦死者は「英霊」として祀られた。

しかし、連合軍最高司令官総司令部(GHQ)は、終戦直後の1945年12月15日に「神道指令」を出し、信教の自由の確立や軍国主義の排除するため、国家神道を廃止した。さらに、靖国神社は1946年に制定された宗教法人法に基づいて、同年9月に宗教法人となった。

靖国神社に祀られる「神」は、戦死、戦傷病死をした軍人、軍属とそれに準じる人々であり、新たな戦死者が出るたびに「祭神」に加える合祀の手続きが取られることになっている。靖国神社の資料によると、合祀者の総数は246万人強となっている(1)。

首相、閣僚の参拝では、靖国神社の宗教法人化後では、1951年10月18日に当時の吉田茂首相は公式参拝した。これが戦後では最初の公式参拝だった。

問題は、「A級戦犯」の合祀にある。A級戦犯とは、戦後の極東国際軍事裁判（東京裁判）で、ポツダム宣言6条に基づき定義された戦争犯罪（「平和に対する罪」）で有罪判決を受けた者のことである。靖国神社は1978年10月17日、A級戦犯として死刑ないしは終身刑で獄死した東條英機元首相（陸軍大将）、広田弘毅元首相（外交官）、平沼騏一郎元首相（枢密院議長）ら14人を国家の犠牲者である「昭和殉難者」として合祀した。

戦犯の合祀は、1959年にB,C級戦犯から始められ、A級戦犯14人については70年初めに靖国神社の崇敬者総代会で合祀することが了承された。しかし、国民感情への配慮から実現したのは78年だった。当初、公表は控えられたが、1979年の報道で知られることになった。だが、A級戦犯の合祀された後も、自民党歴代内閣の首相は靖国参拝を行ってきた。福田首相（1回）、大平首相（3回）、鈴木首相（9回）、中曽根首相（10回）、橋本首相（1回）、小泉首相（6回）、安倍首相（1回）の7人の首相が、首相在任中に参拝をしている。

昭和天皇による靖国神社「親拝」は、戦後になって合計8回（45年、52年、54年、57年、59年、65年、69年、75年）行われた。しかし、1975年11月21日を最後に天皇陛下の親拝は中止されている。その理由について、昭和天皇がA級戦犯の合祀に不快感をもっていたからだとの意見、見方もあるようだ。

中曽根首相も1985年4月22日に参拝したが、それまでは海外から抗議や懸念が表明されるようなことはほとんどなかった。しかし、同年8月15日の中曽根首相の参拝に対して、朝日新聞が8月7日付で「靖国問題」を特集、中国政府は8月14日に初めて公式に靖国神社の参拝への懸念を表明した。85年は、日露戦争80年、終戦40周年の節目の年だった。それでも、中曽根首相は終戦記念日の8月15日に閣僚17人とともに参拝した。

靖国神社のあり方に新たな問題を投げ掛けたのは、2001年に首相となった小泉首相だった。小泉首相は、同年4月の自民党総裁選挙で、「首相になったら8月15日にいかなる批判があろうと必ず参拝する」と明言した。しかし、中韓両国などの反発から、首相就任後、初めて参拝したのは8月13日だった。公約を破っての参拝に、国内からは「選挙対策でしかなかった」との批判も受けた。

小泉首相は参拝にあたって、「アジア近隣諸国に対しては、過去の一時期、誤った国策にもとづく植民地支配と侵略を行い、計り知れぬ惨害と苦痛を強いた」と述べるとともに、「こうしたわが国の悔恨の歴史を虚心に受け止め、戦争犠牲者の方々すべてに対し、深い反省とともに、謹んで哀悼の意を捧げたい」との談話を発表した。しかし、退任を前にした5年後の2006年8月15日早朝、現職首相としては中曽根元首相以来21年ぶり、自身としては6回目の靖国神社参拝を行った。中国、韓国が猛反発し、中国外務省は「日本軍国主義者らによる戦争の被害国の国民感情を傷つけ、中日関係の政治的基礎を破壊するもの」との非難声明を発表した。韓国外交通商省も、「深い失望と憤りを表明する」との報道声明を発表した（1）。

しかし、第2次安倍内閣になると、2013年4月に3人の閣僚が靖国神社を参拝した。安倍首相も同日、神前に捧げる供え物「真榊」を奉納した。中韓両国の反発が強まる中、安倍首相は2013年12月26日、首相就任1年目を期したこの日、礼服姿で公式参拝した。

第3章 日本人の世論

日本社会では、首相の靖国神社への参拝に関して幅広い意見がある。参拝の支持者は、自分の国のために命を捧げた人々を賛辞をするのは非常に自然だと考えている。これは当然のことながら、命を捧げた人に対する尊敬はそれぞれの国の歴史、文化、伝統に応じてさまざまな方法で表現されている。これらは各々の国の問題であり、他国に干渉しないべきだと言われている。反対派は、日本の政治家が他の国の人々の感情を注意するべきであり、他の国の人々の反感を買い、友好関係を損なうような行動を避けるべきだと主張している。

26日12月2013年の安倍首相の参拝後に行われた世論調査の結果を見てみよう。

Yahoo 意識調査によれば、安倍晋三首相の靖国神社参拝について「妥当」との回答が8割近くに達しているようだ。民放TBS系情報番組の緊急世論調査でも「賛成」という回答が7割を超える。

朝日新聞が11月6日から12月20日まで、年齢による歴史的認知の差も考慮して、年齢別に5500人を対象にアンケートを実施した。調査の結果、日本の首相が靖国神社を参拝することに賛成の20代は60%、30代以上は59%であった。一方、反対は20代は15%、30代以上は22%であった。特に興味深い結果は、靖国神社には、第2次世界大戦中の日本の指導者だった東条英機元首相らの戦犯もまつられていることを知っている20代が56%、30代以上は84%占めていた。そのうえ、20代の45%と30代以上の55%はこの戦争はアジアに対する侵略戦争だと思っていたにもかかわらず、前述のとおり、靖国参拝を正当化している(6)。

このように、回答者は歴史の知識があるにもかかわらず、安倍首相の靖国参拝を支持していると明らかにした。これは日本人のメンタリティーの特徴の証明の一つだと思われる。それは、若者はナショナリズムの考え方ではなく、むしろ日本の伝統的な宗教に深く浸透された結果である。

終わりに

韓国と中国は、日本の侵略によって最も大きい影響を受けて、日本の政治家の靖国神社参拝に対して非常に敏感で、日本のナショナリズムと軍国主義の復活として捕らえている。しかし、このような反応は、主に客観的現実を反映したものではなく、第二次世界大戦の歴史的な事実のために、政治的な気質を持っていると考えている。確かに、韓国と中国の抗議があるにもかかわらず、なぜ日本国首相は靖国参拝するかという質問に答えることは困難である。しかしながら、韓国や中国と異なる日本の宗教的伝統の理解がなければ、靖国神社への参拝の理由を説明することはできない。

どこの国でも国のために戦死した人を祀るのは当然のことだと考えられている。国を守るために、または国のために戦死した人の慰霊なくして永続的な国の繁栄と発展はできなくなるのではないだろうか。そのため、神道の重任の一つは戦死者の英霊を招魂することである。靖国神社の「靖国」は国を安らかに治めるということであり、靖国神社での儀式は神道の伝統に従って行われていると考えられている。

もちろん、かつてある期間のみ、神道（国家神道）は政治的・民族主義スローガンを促進するために使用されていた。しかし、日本の政治家の言動は、長い軍国主義・民族主義以前の日本人の心に深く根ざされている神道の影響であると考えられる。そして、おそらく、この影響によって、外国人の視点からこれらの言動は異様な光景に映る。

ちなみに、神道伝統を分析した上で、靖国神社は「戦争神社 war shrine」ではなく、ヨーロッパのような無名戦士の墓に見られる。

前述のように、歴史上の最大の問題は「A 級戦犯」の合祀である。この問題の解決策、打開策はあるのか。自民党は一時期、靖国神社に対し、A 級戦犯の合祀の取り下げ、または分祀することを打診する。しかし、靖国神社側は、いったん神として祀った「神霊」を取り下げることができないと拒否した。その後も、A 級戦犯の分祀と無宗教の国立戦没者追悼施設の建設などが検討されてきたが、決着していない (1)。

こういった靖国神社問題の解決は、政治学だけではなく、宗教学や社会学にとっての将来の大きな課題であろう。

参考文献

1. 「靖国神社」の基礎知識
<<http://www.nippon.com/ja/features/h00071/?pnum=1>>
(2016/07/13 アクセス)。
2. 「日本人にとって神（カミ）とは」
<<http://www.nippon.com/ja/in-depth/a02902/>>
(2016/07/13 アクセス)。
3. 「日本文化における神道の役割（過去・現在・未来）」
<http://www.shinto.org/wordjp/?page_id=2>
(2016/07/13 アクセス)。
4. 「神葬祭」
<<https://ja.wikipedia.org/wiki/神葬祭#.E7.A5.9E.E9.81.93.E3.81.AE.E6.AD.BB.E7.94.9F.E8.A6.B3>>
(2016/07/13 アクセス)。
5. 田村譲 「靖国神社に関する一考察」『松山大学論集』第13巻・第5号・336-369ページ。
6. 「首相の靖国参拝 朝日の世論調査でも6割賛成」
<<http://bylines.news.yahoo.co.jp/kimuramasato/20131230-00031149/>>
(2016/07/20 アクセス)。
7. Молодякова Э. В. 2007 «Многоаспектность проблемы святилища Ясукуни» – Япония. Ежегодник №36/2007, с. 48-68.
8. Кожевников В.В. 2014 «Синто и национализм в Японии (проблема храма Ясукуни)» – Национализм и этноконфессиональные факторы в формировании и реализации внутренней и внешней политики стран Северо-Восточной Азии на рубеже XX — XXI вв. 2014, с. 166-179.